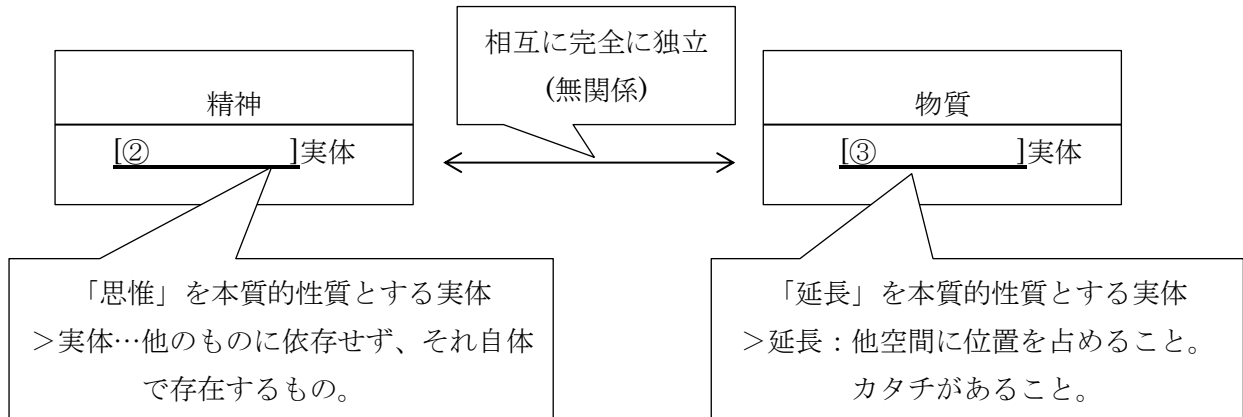


倫理 第31回 西洋近現代思想(6)

「自然や科学技術と人間とのかかわり③ デカルトの物心二元論に対する挑戦／自然をめぐる認識」

○今回のポイント

デカルトの[①]…物質(身体)と精神(心)を完全に分離し、それぞれ「実体」であるとする。



(1)物心二元論に対する経験論からの批判

a.物質の存在の否定 [④]『人知原理論』 「存在するとは知覚されることである」

→意識から独立した物質の存在を否定する。知覚されないモノは存在しない。

b.精神の存在の否定 [⑤]『人間本性論』

- ・精神、自我は「実体」として存在しない。心そのものは知覚できないので、心は[⑥ 知覚の束]に過ぎない。
- ・[⑦]の否定

→因果律というもの自然の中に存在するものではなく、人間が過去の事例をもとに心の習慣として抱くものに過ぎない。

例)「水が沸騰する」→「お湯になる」 「水が沸騰する」現象と「お湯になる」現象に因果はない。

- ・過去に起こった現象の連鎖が明日も必ず起こるという保障はない。(気圧やそのほかの条件が明日すっかり変わってしまったら同じことは起こらない)

・現象Aと現象Bは知覚できるけれども、AとBの因果関係そのものは知覚できない。

(2)物心二元論に対する合理論からの批判 ☆デカルトは精神と物質という2つの実体が存在するとしたが…。

a.批判その1；実体は神のみ [⑧]の「汎神論」

→スピノザは、これらはいずれも神の現れに過ぎないとする。この世界に存在するものはすべて神そのもの。

※通常のキリスト教の理解では、神はセカイを創造。セカイ≠神。

b.批判その2；実体はモナド [⑨]の「モナド論」

- ・世界は無数のモナド(单子)からなるという多元論。
- ・[⑩]とは世界を構成する実体であり分割不可能なもの。
- ・能動的な活動性を持つ力の中心で、空間的な広がりを持つ物的な[⑪](アトム)とは異なる。
- ・モナドは外部との交渉を持たない「窓のない」独立した実体であるが、個々のモナドの表象が一致して宇宙の調和的秩序が存在するように、神によってあらかじめ定められている([⑫])。

(1)[13]

- 1.ものごとがそのままにあるさま、ひとりでになるさま
- 2.ものがもともと具えている性質
- 3.山川・草木・雨風など人々をとりまく外界。

(2)古代ギリシャと自然

[14]…何かがおのずから生じ、育って、さらには衰え、滅んでいくことを意味する言葉。

↓ 全ての事物の生成・消滅を支配する原理一般。

ピュシスは万物を包む ⇒人間もまた例外でない =人と自然は一体的

(3)中世キリスト教的世界観

- ・人と自然とを明確に区分する
- ・共通点…人も[15](ラテン語で自然)も神による被造物
- ・相違点…人間は神の[16]

(4)中国

- ・人々をとりまく外界=「天地」、「万物」
- ・自然←[17]が特別な意味をあたえる
自然は[18]のように、流れるがままありつづけ、人為を受け入れず、それに逆らうこともない
人間の生き方の理想そのもの

(5)日本

a.[19]…日本の古代人は、天候不順・疫病の流行・洪水・地震・火山の噴火などの自然現象を、
崇り(神の力が目に見えるような形をとってあらわれたもの)と考え、そのような恐ろしい
神を祭りなだめることによって豊穰の恵みを期待した。

b.四季折々に美しい花鳥風月…風流の対象として眺められる自然界の景観

c.生まれては死んでいくもろもろの個物を包み、永遠に存続する天地

(6)生命的自然観から機械論的自然観へ

神の「似姿」である人間 ⇒ 自然の一部でありながら自然の支配者

↓

万物を生みなす[20]⇒ 万物を等質な延長へと還元する[21]

↓

人間の身体や自然現象を作動する精巧な機械をモデルにしてとらえる

↓

科学・技術の発展